

[書評]

ナイジェル・オールソップ 著／河野 肇 訳

『世界の軍用犬の物語』

エクスマレッジ、2013 年刊

Cry Havoc: The History of Military Dogs

Edited by D. Nigel Allsopp,
New Holland Publications, 2011

評 本多 倫彬

キヤノングローバル戦略研究所研究員

Reviewed by Tomoaki Honda
Research Fellow, The Canon Institute for Global Studies

本書は、東日本大震災の救援活動における海上自衛隊の警備犬(災害救助犬)の活躍もあって、近年、日本でも一定の知名度を得つつある軍隊が使役する犬(軍用犬)に焦点を当てて、その誕生時から現代に至るまでの戦争の様態変化の中での軍用犬について史的分析を行ったものである。その上で、世界各国における最新の軍用犬運用状況を分析し、その現代的意義を明らかにしている。したがって純粋な研究書というよりも、軍用犬についての基礎知識を網羅した教科書という側面を有している。

元々、牧羊犬や荷役犬の伝統を持つヨーロッパ諸国と異なり、犬の能力を活用して人間社会のニーズを満たす文化は、日本にはそれほど根付いていない。このため日本は、軍用犬という言葉は知られていてもその能力や特徴、役割、意義、自衛隊での運用状況等についての知見が、広く共有されているとは言い難い状況にある。

また、軍事に係る研究は、一般に機密の壁との戦いになるものだが、本書は著者自身がニュージーランド軍の軍用犬ハンドラーであった経歴とネットワークを活かし、各国軍の最新の軍用犬の運用状況を詳細に整理している。序文を寄せているジョージ・ホルス(豪州陸軍工兵隊退役将校)が、「これほ

どの情報を本に著す許可を得た彼の力量に驚いている」と率直に記すように、圧倒的な情報量を含んでいる。著者自らが指摘するように、軍用犬の任務がますます増加している現代の軍事作戦の状況を鑑みれば、今後、必然的に進むと思われる軍用犬に関する研究において、本書は議論の共通の土台を提供するものとなるだろう。

そこで以下では、最初に本書の内容を簡単に整理して、その特長について紹介する。その上で、軍用犬に焦点を当てる教科書の書籍が日本で出版されたことの現代的意義について、評者の感想を述べることにする。

本書の構成はシンプルな2部構成である。第1部「軍用犬の歴史」は、軍用犬を巡る総論部分であり、軍用犬の起源と発展の系譜、また多岐に渡る軍用犬の種類の解説と整理がなされている。続く第2部「世界の軍用犬」では、各国の軍用犬の運用状況や特長を網羅的に整理し、最後に「軍用犬の未来」と題する節を置いて、軍用犬の今後の展望を述べている。

古代から現代まで軍用犬の任務はいかなる変遷を遂げてきたのか、第1部を読むことで理解が深まる。同時に本書で特筆されるべきは、第2部にあると思われる。第2部で著者は、軍用犬の運用に伝統ある欧州各国、世界で最も多くの軍用犬を運用するアメリカ、さらにアジア、アフリカの数多くの発展途上国や、中国やロシアといった一般に軍事に係る情報が取りづらい国々まで、広範に整理を行っている。以下では内容について簡単に整理してみたい。

1章・2章で著者は、軍用犬の起源、歴史を紐解き、軍用犬が時代ごとにいかに使われて発展してきたのかを簡潔に整理する。軍用犬は誕生から長らく、直接の攻撃任務に用いられてきた。例えばハンムラビ法典で有名な古代バビロニア王ハンムラビは戦闘犬を活用しており、それ以前の古代世界でも、エジプトやギリシャ等で戦争を描いた壁画の中に、敵兵に襲い掛かる軍用犬の姿が描かれているという。時代を下って10世紀のイングランドでは、ウィリアム征服王がヘースティングスの戦いで軍用犬を活用し、その後の1518年にはヘンリー8世が400頭の大形犬（マスティフ）をスペインのカルロス1世に対仏戦の援軍として送り、カルロス1世は軍用犬部隊を「名誉と勇気の

手本であると称賛した (29 頁)」とされる。同様に、フリードリヒ大王やナポレオンといった、戦争に革命をもたらした偉大な軍略家たちが、軍用犬を用い、軍用犬について語った言葉が残されている。銃火器が発展し、直接戦闘に軍用犬が使用される機会は減少する一方、最前線での伝令や輸送任務で軍用犬は活躍し、例えば第 1 次世界大戦では、ドイツ軍が約 30,000 頭、フランス軍が約 20,000 頭を使ったことをはじめ、多数の軍用犬が使用されたという。著者はこのように古代からの軍用犬の歴史を描き出す。

その上で、技術や戦術の進化に伴い戦争が複雑化・高度化した現代でも、ローテクである軍用犬は最新のテクノロジーに勝る多くの優位性を有しており、世界各地で相変わらずその重要度が増してきたことを指摘する。その能力とは例えば、「夜間 1 キロ離れた地点に侵入者がいることを察知し、フェンスを飛び越え、川を渡って敵を捕らえ、味方の兵士が駆け付けるまで離さない (32 頁)」ものであり、その効果は、「警備に一小隊に相当する兵士数を必要とする地域でも、少人数の軍用犬チームで警備することができる (33 頁)」ものである。著者は、こうした軍用犬の任務は、能力・コスト両面から現代でも代替手段が存在しない有効な手段であるとし、それゆえに今後とも軍用犬が使い続けられるであろうと述べる。

3 章「軍用犬の種類」では、軍用犬のみならず盲導犬等、現代の使役犬の代表としてよく知られるジャーマン・シェパードやラブラドル・レトリバーといった犬種と、各犬種が持つ特性に応じて、用いられる任務について解説を加えている。4 章から 10 章は、そうした軍用犬の担う任務を解説している。軍用犬の任務は多岐に渡り、軍用犬は任務に応じてさらに区分される。すなわち、警備犬・警察犬、捜索犬・斥候犬、地雷探知犬、伝令犬、歩哨犬、戦車爆破犬、攻撃犬、輸送犬、災害救助犬、トンネル犬、麻薬探知犬、銃器・爆発物探知犬、マスコット・コンパニオン犬といったものである。いずれもその名の示す通りの任務に従事するものであり、そうした多様な役割は、時代に応じて変化してきた。例えば、兵士と並んで最前線で突撃を行う戦闘犬として、古代には鎧を身に付けた頑強な大型犬が活躍した一方、銃器の発達した近代では、こうした攻撃犬の有効性は無くなり、ほとんど見られなくなったという。

また、9・11以降の対テロ戦争の中では特殊部隊の役割が増してきたことが知られているが、6章ではそうした特殊部隊による軍用犬の運用について解説がなされている。イラクやアフガニスタンで英国特殊空挺連隊は、高度7,000メートルから特殊部隊員と共に酸素マスクを装着した軍用犬を降下させ、敵のアジトを捜索させているという。この任務では、頭部に小型カメラを装着した軍用犬により、捜索状況がリアルタイムで部隊に知らされる。当然、軍用犬が晒される危険は大きい、「犬の命か人間の命か」となった場合、当然人間の命が優先されることになる。一見すると比較的危険の少ない災害救助犬の哲学も同様であり、犬の優れた嗅覚を用いるという目的のほか、二次災害時に犬の命で済むという命の値踏みが存在する。同時に、こうした危険な任務に従事する軍用犬の防護も重要な課題であり、紛争地で活躍する軍用犬のために、米軍等では専用装甲車が開発されているという。

こうして軍用犬の活躍が増えるに従って、近年では軍用犬の顕彰制度や退役後の処遇に関する法律が整えられてきたことを、7章は解説している。過去には、戦闘で死亡した軍用犬が顕彰されることもなく、また第2次世界大戦後に世界最大の軍用犬保有国となった米軍は、しばしば軍用犬を戦地に置き去りにし、また年を取った場合には安楽死させてきたという。しかしながら米国では2000年に法律が改正され、引退した軍用犬は米国内の任務に就いたり、ハンドラーや民間に引き取られるようになったという。こうした動きは米国以外でも増加しており、例えばイギリスでは2004年に軍用動物（犬に限らない）のメモリアルの除幕式が史上初めて行われ、オーストラリアでは2008年に初めて軍用犬に対して勲章が授与されたという。また、戦場はもちろん、退役軍人の肉体的・精神的ケアにあたるセラピー犬や介助犬としての活躍が進められており、米国では2001年に「退役軍人介護計画」として、心身に傷を負った退役軍人の介護にあたるコンパニオン犬の経費が公費によって賄われているという。軍用犬の任務の重要性を踏まえ、その社会的基盤が整えられてきたものと総括されよう。

第2部「世界の軍用犬」では、前述したとおり各国の軍用犬運用状況が網羅的に整理されている。紙面の関係から各国の詳細は割愛せざるを得ないが、

ここでは以下の2点を指摘しておきたい。第1に、開発途上国を含めた世界の多くの国で軍用犬は、軍隊に当然あってしかるべき能力として整備が進められているという事実である。例えばアジア諸国をみてみれば、インドは世界で最も多くの軍用犬を使用している国であり、また反政府軍との長年の戦いの中で実戦経験を積んだスリランカの軍用犬は世界トップクラスの能力を持っているという。フィリピンは2000年以降にミンダナオ紛争をはじめとする国内紛争においてテロの被害を受けたことでテロ対策に軍用犬部隊の育成を進めており、中国は国連PKO派遣において工作部隊が、軍用犬による地雷・爆発物探知を担っている。軍用犬の活用が限定されている日本と照らしてみた時、これらの事実はそれぞれ驚くべきであろう。

第2に、現代の戦争において軍用犬の持つ能力の意味について、基本的には「抑止」にあるということである。第1部で著者が示すように、古代においては大型の犬種を武装させて兵士とともに直接的な戦闘任務に従事させていた。また、両大戦では軍用犬が伝令や戦車爆破の任務も担っていた。しかし、銃器と通信技術の発達によって現代の軍用犬は、歩哨や銃器・爆発物探知といった任務が主体となっている。とりわけ「住民の中での戦争」とも言われる非対称戦、対テロ戦争といった敵の姿が見えにくい戦場の中では、テロリストの侵入を防ぎ、そして敵の武器・弾薬庫やIED（即席爆発装置）、地雷等を探知し、敵の攻撃を未然に防止する任務に就いている。これは、「犯罪計画の実行を中止させる強力な抑止力になる。軍用犬を相手にして悪事を働こうとする者はまずいない（85頁）」ということであり、著者が「国際的テロの激化を背景に、軍用犬チームの出動回数が少しも減らないのも何ら不思議なことではない（85頁）」と述べる所以でもある。

以上の軍用犬の現代的役割を論じるに当たって本書は、テロとの戦いが進展した9・11以降の戦争の様相を念頭に置いている。この中での軍用犬の任務とは、例えば「アフガニスタンでは、あらゆる検問所に爆発物や火器を探知する軍用犬が配備されている（15頁）」と指摘があるように、イラクやアフガニスタンといったテロとの戦いの最前線でのIEDや地雷探知、検問所における銃器・爆発物探索、危険地域での歩哨や弾薬庫・武器庫の搜索、兵士

のケアといったものである。このことは本書が、基本的には21世紀の最初の10年を特徴づけてきたテロとの戦い（著者のキャリアの時期に相当する）の様相を色濃く反映した軍用犬の運用理論であり、対テロ戦争以降の戦争の様相と密接に関連している点に特徴があると言える。

このような取り組みの分析を通じて本書は、動物のもつ能力を人間の役に立てるといって、古代から続けられてきた非常にローテクに属する軍用犬が、ますますその役割、重要性を拡大していくことを明らかにしている。近年、安全保障研究では、宇宙やサイバー、ロボットといったように、テクノロジーの高度の発達に伴う領域に焦点が集まるようになってきている。著者は、軍用犬もテクノロジーの恩恵を受けて、装備や機材の発展がなされており、今後もその発展があり得ることに言及する。一方で、コスト面を含めて軍用犬の担う役割を代替できるテクノロジーはまだ当分は開発されそうになく、また軍用犬のさらなる能力開発も続けられるがゆえに、今後の軍用犬の未来は明るいという認識を示すのである。

本書は、軍用犬という自衛隊には非常に限定されている能力を対象に、近年の平和作戦や安定化作戦におけるその重要性を実証的に明らかにすることを通じて、実際の活動上の問題を考える必要性を提起している。日本では、安全保障政策を巡る論議について、憲法や集団的自衛権を巡るものなど、抽象度の高いテーマに焦点が当たりがちである。しかしながら日本は現在、国家安全保障戦略の中で示された新たな理念を実行に移すために、その具体的方法を構築する必要にも迫られている。無論、著者の意図するところではないものの、日本の掲げる積極的平和主義の射程の1つにある国際平和協力について、具体的に必要な能力の検討を要することを明確に示す本書は、現在の日本にとって有益な視座を提供しているものである。

参考文献

マイケル・バタニティ「戦場で兵士を守る犬たち」『ナショナル・ジオグラフィック』日経ナショナルジオグラフィック社、2014年6月号、pp.36-59。

〔受付日 2015.5.13〕

〔採録日 2015.8.31〕